

校長室より

第106号

「天空高き」



平成30年3月13日

## 好きこそものの上手なれー卒業式を終えてー

今年の冬は異常寒波が日本列島を包み込み、例年にならない厳しい寒さが続きましたが、校庭の草木や頬をなげる風に、春の息吹を感じる季節になりました。

3月1日に、六年制普通科43名、普通科178名の卒業生を、皆さんと共に無事に送り出すことができました。ありがとうございました。

私は式辞の中で、「好きこそものの上手なれ」という諺を紹介しました。

好きなればこそ、飽きずに努力するので、遂にその道の上手になるという、意味です。

韓国のピョンチャンで開催された冬季オリンピックで、多くの日本人選手が活躍してくれました。

彼らはそれぞれの競技種目を好きではじめ、負けて悔しい思いをし、ときにくじけそうになる自分を叱咤激励し、創意工夫して、地道な努力を続けてきたからこそ、今があるのです。

4年前のソチ五輪では、国民の金メダルの期待を一身に背負い、4位に終わったスキージャンプの高梨沙羅選手は、今回見事に銅メダルに輝きました。その時のコメントは「4年前の自分に、『楽しんで飛べたよ!』」です。

好きになって楽しむことが、一番であることを、彼女は我々に体現してくれました。それは、まさに、本学園の建学の精神である「楽学」、「朋と共に学ぶことを楽しむ」に通じます。

皆さん、「好きになって楽しむ」こそが、成功するための一番の近道です。皆さんはいずれ社会に出て、仕事に就きますが、自分の会社や仕事を好きになって、楽しむことです。

中学・高校の時代は皆さんにとって、社会に出るための準備期間です。家族を大事にする、学校が好きになる、授業を真剣に受ける、好きで入った部活動を一所懸命に



「人は一人では生きていけない。皆の助けを借りなくちゃならない。だから人に優しくしてあげなさい」 田中善六（国際ロータリー第253区ガバナー）

頑張る。皆さんにとって、今を前向きに全力で取り組むことが大切です。

## 「烏岳峰」—第6回中六合同発表会から—

高水学園の建学精神、「徳性の陶冶」。教育により人格を錬成し、社会に貢献できる人物を養成することです。

第6回目となる付属中と六年制普通科による合同発表会が、実践室で開催されました。今回は、特に付属中では、総合的な学習の時間「楽学」を学年の枠を取り払い、生徒の興味・関心に応じて9のゼミに分かれ、協働して探究学習に取り組み、その成果を披露しました。

皆さんは、いずれは社会に出て、仕事に就きます。社会に出ると、年配や後輩の人達とチームを組んで働きます。グローバル化が進み、言葉や文化の異なる人たちもいるかもしれません。その時に、まず、問われるのは、コミュニケーション力です。そして、仲間と一緒に協働していく力、協調性や寛容性が求められます。

付属中の学年の枠を越えた探究学習への取り組みは、社会で必要とされるコミュニケーション力と仲間と協力していく力を養成することにあります。テストでよい成績を取ることもとても大事なことです。それだけではこれからの社会で生き抜いていくことはできません。いくら地頭が良くても、他者との対話や協働する力が弱ければ、職場や社会で厳しい状況に追い込まれます。

グローバル化が一層進み、人工知能（AI）の発展により、私たちの身の回りの生活や職場での業務がロボットやコンピュータに置き換えられていきます。このような社会情勢の中を私たちが21世紀を生き抜いていくためには、個人で何かができるというだけでは不十分です。私たちは他者や多様な集団と協働してコミュニケーションを取りながら課題に取り組み、問題を解決していく、21世紀型の力が求められています。

## 素敵な言葉の贈り物—2018平昌冬季オリンピック—

平昌冬季五輪は、17日間にわたった大会の幕を閉じました。日本からは124人の選手が参加して熱戦を繰り広げました。私たちは、日本代表選手の活躍に感動、元氣と希望をもらいました。大会を振り返り、私が素敵だなと感じた選手のコメントを紹介します。



### ・古谷沙理（バイアスロン）

「ベストパフォーマンスができれば何かが起こせる！と挑んだオリンピックでしたが、届けたかった喜びを届けることはできませんでした。しかし、ここに至るまでたくさんの方々に見守っていただき、活動してきた日々には悔いはありません。

ここに至るまでに“できるようになることの楽しさ”、そして“自分が誰かの喜びになれること”を学びました。今後は私が誰かの笑顔を作れるように、そして笑顔の種を増やせるように、たくさんの方々と一緒にいきたいと思えます。

やっぱりオリンピックは特別な場所なのだと感じました。応援してくださった多くの方々、本当にありがとうございました」



### ・坂爪亮介（スピードスケート・ショートトラック男子500メートル 8位入賞）

「自分の目標としているものには届きませんでした。個人戦については持てるパフォーマンスを出せたのではないかと思います。……ただ試合をしていて、この舞台が最高だということを感じることができましたし、何度も目指したくなる意味も分かったような気がしました。競技を歩んでいく過程でいろんな挫折も経験しながら競技をしてきました。これから先も、このようなことはたくさんあると思います。自分を磨くということ、常に学ぶということ、謙虚さ、大切なことを忘れずに前に進んでいけたらと思います」

今回オリンピックに出場した選手のコメントを読むと、メダルを取るためには、切磋琢磨して技術力、体力、精神力のバランスを整えるだけでなく、人間性も磨く必要があることです。そして、最後には必ず同じ言葉が出てきます。それは「感謝」です。自分を支えてくれた監督、コーチ、スタッフや家族、そして応援してくれた人達への感謝の言葉です。

## 「立つ！」—3月の月間目標—

「立つ」：事物が上方に運動を起こしてはっきりと姿を現す。（広辞苑）

3月は別れの時期であり、旅たちの季節でもあります。皆さん、この1年間を振り返って何が、どんなことができるようになりましたか？私はいつも、頭を使って、体を動かして、心を鍛えることが大事だと言っています。皆さんは、いずれは親元を離れ飛び立って行きます。しかし、独り立ちできるための準備期間は限られています。今（中・高校時代）を、前向きに、全力で取り組むことが大切です。



## 今の科学で地震が予知できるのかー正解のない問題を解くー

科学や技術が進歩すれば地震は予知できる。そんな前提の下、今から 44 年前の 1965 年に国の地震予知計画が始まり、大規模地震対策特別措置法（大震法）が制定されました。

大地震の前兆現象が観測されると、総理大臣から警告宣言が出され、住民避難や学校の授業中止が勧告されます。しかし、一度も警告宣言が発令されることもなく、私たちは阪神淡路大震災や東日本大地震を経験してきました。

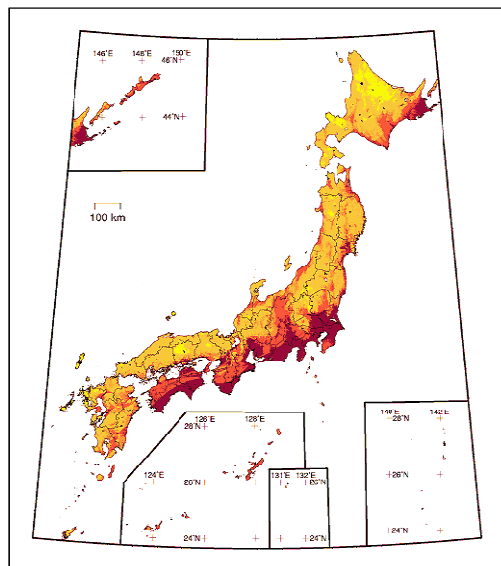
昨年の 9 月に政府の中央防災会議で地震の予知は困難として防災態勢の見直しが行われました。現在、政府から出されているのは「確立論的地震動予測地図」です。

「確率論的地震動予測地図」とは、全ての地震の位置・規模・確率に基づき各地点がどの程度の確率でどの程度揺れるのかをまとめて計算し、その分布を地図に示したものです。

右図は 2017 年を起点として今後 30 年間に震度 6 弱以上の揺れに見舞われる確率を示したものです。関東から四国の沿岸部で色が濃くなっています（確率が高い）が、地震は日本中どこでも起きます。そして首都直下型地震、南海トラフ地震は 30 年以内には高い確率で起きることが示されています。しかし、それは明日かもしれませんし、30 年後かもしれません。現在、分かっていることはそこまでしか言えません。

私たちは過去の記録から大地震はある周期で起こることはわかっています。しかし、日時や場所は特定することはできません。研究を進めると予知できるようになる、そう信じて、44 年前に地震予知計画を開始しました。その結果、地震は予知できない、ということが 44 年間の研究成果で分かりました。

地震は予知できない。ということが科学的に分かったので確率論的予測に変更されました。



### 24節気

【啓蟄】けいちつ：3月6日頃

大地が温まって、冬ごもりから目覚めた虫が、穴をひらいて顔を出す頃。「啓」はひらく、「蟄」は土の中にとじこもっていた虫（蛙や蛇）という意味です。ひと雨ごとに暖かくなり、日差しも春めいて、生き物が再び活動し始めます。

【春分】しゅんぶん：3月21日頃

昼夜の長さがほぼ同じになる日で、この日を境に陽が延びていきます。春分の日には彼岸の中日で前後3日間を春彼岸といい、先祖のお墓参りをする習慣があります。「自然をたたえ、生物をいつくしむ」として国民の祝日になっています。

出典「暮らし歳時記」